

創造性、活動、奉仕（CAS） 指導の成果と課題

CAS コーディネーター 源嶋 大央 横山 瑛樹

1. 要旨

CAS（創造性:Creativity, 活動:Activity, 奉仕:Service）はEE、TOKと共にコア科目に位置付けられている。IBの学習者像の特質を現実的かつ、実際的な方法で実践することで、個人として成長するとともに、他者との関係における自分の役割を認識する機会となる。

1期生が令和4年3月に卒業し、無事に全員がCAS活動を完遂した。ここでは令和2年4月に入学した2期生のCASを振り返り、成果と課題をまとめる。

2. プレCAS (2020.4~12)

プレCASの指導の過程

実施したプレCASの概要は次のとおりである。（本校CASハンドブックより抜粋。新型コロナウイルス感染拡大による休校、分散登校の影響で変更が多数あった。）

4月 オンライン	プレCASワークショップ① 【CASとはなにか】 「CASとはなにか」をテーマにCASの全体像を学んでいきます。
5月 オンライン	プレCASワークショップ② 【CASについて深く考える】 「CASに関するケーススタディ/リスクアセスメント」をテーマに実際のCASの活動のイメージを作っていきます。
6月 ～7月 対面 オンライン	プレCASワークショップ③ 【CAS体験準備】 「CAS体験」を実施するための準備を行っていきます。このワークショップは大きく分けて3つのセクションに分かれます。（後述のように変更） ① CAS体験について/校内ニーズ探索 ② 校外フィールドワーク準備 ③ 校外フィールドワーク/CAS体験計画
夏季休業中 ～9月	CAS体験 ワークショップ③で計画したCAS体験を実践します。ここでは、計画⇒実践⇒振り返りの一連の流れを実践していきます。
10月 以降対面	プレCASワークショップ④ 【CAS体験振り返り】 CAS体験で得た学びについて振り返りを行います。振り返りを含めて「CAS活動報告書」に記入し、提出をします。
11月～ 12月	プレCASワークショップ⑤ 【CAS計画&CASアドバイザー発表】 これまでの学びを生かして、DPスタート後に実施するCAS活動の計画を立てていきます。また、担当するCASアドバイザーとの顔合わせを行います。

夏季休業期間を利用したCAS体験は、新型コロナウイルスの影響を考慮し、サービスの活動に特化せず家庭での活動も含め完全に自由とした。したがって1期生の時とは全く異なるものとなった。

3. DP Year 1 (2021.1~12) の取組み

3.1 1回目 CAS 面談までの取組み

CAS では定期的な振り返りの機会を持つことが重要視されており、本校では2年次以降2週間に1度程度の定例ミーティングをアドバイザーと生徒が行うこととしている。また、IBが定めるCASのプログラムの中では3回の公式な面談を行うことが必須要件として定められている。1回目のCAS面談では次の確認をした。(本校CASハンドブックより抜粋)

	CAS スタート & CAS 面談 1 回目
【DP スタート】 1 月 CAS 面談は 2 月～3 月	1 回目の面談では次のことを CAS アドバイザーと確認していきます。 (1) 18 か月間の計画の確認 (2) 学びの成果をどのように達成するか (3) CAS プロジェクトの構想について CAS の実践開始にあたり、みなさん自身が自分の CAS 活動をどうやって成功に導こうとしているのかを深めていきます。

CAS 活動が始まる頃には新型コロナウイルスの影響は想定範囲内となっており、生徒は新型コロナウイルス対策をリスクアセスメントとして取り入れるようになった。また、年次を越えて協力してCAS活動を行うなど活動の幅が広がっていった。

3.2 2回目 CAS 面談までの取組み

4月になり、生徒は様々なCAS活動を考え、提案するようになっていった。DPも本格化し多くの課題とCASを両立することは大変であるが、他者と協力しながら乗り越え、最も成長した期間でもあった。

2年次の7月頃に実施した2回目のCAS面談では次のようなことを確認した(本校CASハンドブックより抜粋)。特に、CASプロジェクトと呼ばれる他者と協力して行う規模の大きな活動を、コロナ禍でどのように実施するかが確認のポイントとなった。

	CAS 面談 2 回目
7 月	2 回目の面談では、CAS の進捗状況や CAS プロジェクトなどについての確認をアドバイザーと行っていきます。 (1) 3 つの要素 (C, A, S) のバランスは取れているか (2) これまでどのような学びの成果を達成できたか (3) 活動に対する証拠は揃えられているか (4) これからの計画に変更はないか (5) これから始める CAS 活動への準備はできているか (6) CAS プロジェクトの進捗状況はどうか

しかし、新型コロナウイルスの流行の波もあり、計画の変更や制限は引き続きある状態であった。外部との協力を推奨していたが、自粛の影響などで断られることも多く、CASプロジェクトは生徒間で協力するものが主流となり、年次全体ではあまり多くのバリエーションが生まれなかった。

2期生が実施したCASプロジェクトにおいて、生徒がCASアドバイザーに提出した活動のエビデンスを一部紹介する。

(本校 Managebac より抜粋)

ぬいぐるみプロジェクト ～活動の振り返り～

<活動の背景>
SDGs
#3 すべての人に健康と福祉を

・発展途上国での感染症とそれに対するワクチンの必要性

Reborn project
使う機会がない、寄付しても良いものをワクチンとして途上国に寄付
→学校でぬいぐるみの寄付を開始

<活動の結果>
用意したダンボール×4
合計約35×4=140個
のぬいぐるみが集まりました！

発送1件 = ワクチン10人分
ワクチン約40人分への奉仕

Reborn Projectを理由して、ミャンマー、ラオス、ブータンなどの国々の40人の子どもたちにワクチンが寄付されました。

今回の活動がどうグローバル問題に貢献するか：

- 団体に寄付したぬいぐるみの売上が、発展途上国へ送るワクチンの資金になる。
- 活動の必要性を個々が理解することで貧困問題や物資不足等のグローバル問題に目を向けるきっかけになる。また、問題への貢献活動に対する意識を高めることができる。
- 発展途上国でぬいぐるみを販売する際、雇用を生む。
- 不要になったぬいぐるみを再利用することでごみを減らすことができる。

未来のための パン屋さん

SUPPORTED BY 未来のパン屋さん BIG ISSUE JAPAN

**パン屋さんに残ってしまったパン...
まだまだ美味しいのにもったいない!**

未来へのパン屋さんでは、そんなパンたちを皆さまにお安くお届けします。
また、売り上げは全て生活困窮者の支援に使われます!

営業日:8/1(日)～8/3(火)
営業時間:19:30～21:00
場所:アキナイガーデン(弘明寺商店街内)

質問等ございましたらQRコードから未来へのプロジェクトの
インスタグラムへ、または下記連絡先にご連絡ください。

3.3 先輩、後輩との交流

令和3年10月、3期生のCAS体験報告会を実施した。2期生も参加し、発表に対して意見、アドバイスをを行った。後輩の活動について考えることが結果的に自分たちのCAS活動を振り返る機会となっただけでなく、我々が想像していたよりも2期生のCASへの理解が深まっていることを感じる事ができた。12月には1期生との交流を行い、DPを完遂し先輩の体験談を聞き、進路実現のきっかけとした。

4. DP Year 2 (令和4年.1～12) の取組み

4.1 3回目 CAS 面談までの取組み

この期間に入ると、DPの中でも大きな課題であるEE、TOK、各科目のIAの取組みの時間が多く必要になり、CASに関しては継続することが精一杯という生徒が多くなる。CASのクリア要件をまだ満たしていない生徒は春季休業などを効率よく活用し、自身の課題をクリアしていった。3年の8月～10月に行った3回目のCAS面談では次のことを確認し、18ヶ月を振り返った(本校CASハンドブックより抜粋)。

CAS 面談3回目 & CASのフィニッシュ	
9月	<p>3回目のCAS面談では、CASを総括し、CASを完遂することができたのかをCASアドバイザーと確認をしていきます。</p> <p>(1) CASを終え、何を心得、それが自分のどのような成長につながったか</p> <p>(2) CASで得たことを今後どのように生かしていくのか</p> <p>(3) 自らのCAS全体で証拠はそろっているか</p> <p>この面談時に学びの成果7つを達成していることが、CASの完遂を判断する材料となります。</p>

4.2 振り返りと成果、課題

まとめとして、3回目の面談における「CAS で得たことを振り返り、どのように次に繋げるか」という質問への回答の一部を紹介する。

- ・自分にできる活動を自分で計画したことで、成長を実感し自己肯定感が芽生えた。
- ・タイムマネジメントが何よりも重要で、自己管理スキルが向上した実感を得た。
- ・他者との交流を通して、多くの自分の長所に気付けた。

多くの生徒が CAS 活動を経て成長を実感しており、将来に繋げた生徒もいた。海外進学を目指す IB コース生は、CAS のように課外活動を積極的に行う必要がある。また、国内進学においても IB 入試や総合型選抜を主とするため、コアで学んだことは重要視される。しかし、入試の時の自己アピールのために CAS 活動を行うよりは、CAS を通じて将来を考えられるようになることが本来の IB の理念である。定例ミーティングの際に、何のためにその CAS 活動をするのかは生徒とアドバイザーでしっかりと議論を重ねる必要がある。

昨年度課題と考えていた教員間の足並みであるが、4年目にして大きく改善した手応えを感じている。CAS コーディネーターが2人体制となったことで、各年次の担当アドバイザーとの連絡を取りやすくなった。学校全体で CAS 活動を支援していくことへの困難を感じながらもこれは大きな改善である。

新たな課題としては、CAS というよりは生徒の IB への理解不足を1期生よりも年次を重ねるごとに感じるようになった。学業以外に CAS 活動を必須としているが、日本の教育と決定的に違う点の一つである。IB の理念をしっかりと理解した生徒の育成のためにも、入学前の広報等にも力を入れて理解を深める必要がある。